



日本ブロンテ協会



2024年第39回大会プログラム

日時 2024年10月19日(土) 9時50分から17時30分まで

場所 神戸市看護大学 教育棟西館W13教室

〒651-2103 神戸市西区学園西町3丁目4番地 TEL 078-794-8080 (代表)

アクセス：神戸市営地下鉄 学園都市駅から徒歩15分

★受付 9:20~

総合司会 大阪工業大学講師 瀧川 宏樹

★開会の辞 9:50 関西大学名誉教授 坂本 武

★研究発表 10:00~12:00 司会 元関西外国語大学教授 渡 千鶴子

1. 翻訳者たちの『嵐が丘』——作家像をめぐる
北海道大学大学院博士後期課程 行田 英弘
2. ペットの犬と「女性性」：シャーロット・ブロンテ『ヴィレット』における動物表象
バーミンガム大学博士課程 馬場 理絵
3. Emily BrontëとLudwig Tieck 司会 早稲田大学教授 木村 晶子
4. 音が描く情景——エミリー・ブロンテの詩の響き 東京都立大学助教 佐久間千尋
——休憩—— 近畿大学非常勤講師 後中 陽子

★会場校挨拶 13:00~13:10 神戸市看護大学学長 江川 幸二

★総会 13:10~13:40 司会 大阪成蹊大学准教授 片山 美穂

事務局からの報告 東京藝術大学教授 佗美 真理

★奨励賞報告 日本ブロンテ協会奨励賞審査委員長 松蔭大学教授 阿部 美恵

★会長挨拶 大東文化大学名誉教授 栗栖美知子

★大会委員長挨拶 神戸市看護大学教授 山内 理恵

★講演 14:00~15:00 司会 京都大学国際高等教育院副教育院長 廣野由美子

演題「翻訳の領域——私の訳した二冊の本『嵐が丘』と『フロス河畔の水車場』から」

和洋女子大学名誉教授 植松みどり

★シンポジウム 15:10~17:20

「動物表象とフェミニズム：ブロンテ姉妹、ジョイス、ウルフの場合」

司会・発題者 九州大学教授 鶴飼 信光

発題者 宮崎大学准教授 新名 桂子

発題者 北九州工業高等専門学校講師 原田 洋海

神戸海星女子学院大学名誉教授 惣谷美智子

★閉会の辞 17:20

★懇親会 18:00~20:00 於 神戸市看護大学 学生会館1階カフェテリア

Univ. co-op Dining Hall 会費 5,000円

司会 明治大学専任講師 大澤 舞

研究発表

1. 「翻訳者たちの『嵐が丘』——作家像をめぐって」

北海道大学大学院博士後期課程 行田 英弘

物語論者Gérard Genetteは、語り（テキスト本体）と結びつくことでその受容を規定する諸要素をパラテキスト（paratext）と呼んだ。本発表では、歴代の『嵐が丘』の邦訳者たちが抱いてきたエミリー・ブロンテ（Emily Brontë, 1818-1848）像の推移を、訳本に付された前／後書きや解説（狭義のパラテキスト）を資料に用いて跡付けたい。いかなる人物によって書かれたかという作家にまつわる表象は、重要な背景情報（広義のパラテキスト）として作品の受容に影響する。特にブロンテ姉妹については、Lucasta Millerが*The Brontë Myth* (2001) で詳細に描き出したように、「ブロンテ神話」と形容されるほど様々な作家像が打ち立てられてきた。本発表では、不明な点が多い伝記の空隙をいかに埋めているかという点に特に着目しながら、各訳本のパラテキストを時系列順に比較対照することで、日本語訳者たちのエミリー・ブロンテ像の変遷を追いたい。

2. 「ペットの犬と「女性性」：シャーロット・ブロンテ『ヴィレット』における動物表象」

バーミンガム大学博士課程 馬場 理絵

本発表は、『ヴィレット』では、ペットの犬のイメージがルーシー・スノウの複雑な心情を浮き彫りにし、作品解釈に重要な役割を果たすことを指摘するものである。ペットという言葉は、ヴィクトリア朝から現在まで「愛玩動物」という意味を表す一方、比喩としては「お気に入り」や「寵児」のような甘やかさや依存に結び付けられる語としても機能してきた。ヴィクトリア朝において、ペットの犬は甘やかされたラップ・ドッグを想起させ、侮蔑的な表現として用いられることがあった一方、理想的な母や妻によって体現される女性らしさを象徴するイメージとしても機能した。『ヴィレット』には、中産階級の家庭的な女性らしさへのルーシーの憧れと反発が描かれている。ペットの犬のイメージを通して、ヴィクトリア朝における家父長主義的価値観に迎合する女性らしさが肯定的に描かれる一方、同時にこのイメージは、同様の女性らしさを批判的態度と共に突き放すようにも作用している。

3. 「Emily BrontëとLudwig Tieck」

東京都立大学助教 佐久間千尋

本発表では、Emily Brontë (1818-48) とLudwig Tieck (1773-1853) の接点を探る。Paula Sulivanは、*Blackwood's Edinburgh Magazine* (Feb. 1833) に掲載の“Tieck's Bluebeard”と*Jane Eyre* (1847) の関連性を示唆したが、EmilyとTieckの関連性に直接言及した先行研究は見受けられない。*Fraser's Magazine* (Nov. 1831) にTieckの短編に関する記事が掲載されていることも考慮すると、彼の作品がEmilyの目に留まっていた可能性は否定できない。*Blackwood's Edinburgh Magazine*、*Fraser's Magazine*に掲載された記事と*Wuthering Heights* (1847) を分析し、Tieckの影響について考察したい。

4. 「音が描く情景——エミリー・ブロンテの詩の響き」

近畿大学非常勤講師 後中 陽子

多くの文学者は自分の詩が朗読されることを意識して詩作する。Bob Duckettが、ブロンテ家のすべての子どもたちは「力量のある博識な音楽家である」と述べるように、ブロンテきょうだいには音楽の素養がある。シャーロット・ブロンテ（Charlotte Brontë, 1816-55）は、妹エミリー・ブロンテ（Emily Brontë, 1818-48）の詩について、「独特の音楽、野性的で哀愁があり、高揚させるような響きがある」と評した。本発表では、詩における重要な聴覚的要素である響きやリズムに焦点をあてて詩のテキストを分析し、詩人がいかに巧みにことばを選んで詩の情景を描出しているかを考えたい。エミリー・ブロンテの詩を朗読した際に、どのような聴覚的イメージがもたらされるか、彼女の詩にみる音楽的な芸術性（musical artistry）を検証する。

シンポジウム

「動物表象とフェミニズム：ブロンテ姉妹、ジョイス、ウルフの場合」

近年、動物の描かれ方に、フェミニズムに関わる問題の表現を見出そうとする研究が見られるようになった。女性が男性より劣った存在、男性に従属する存在とされる状況を、動物やペットが置かれている状況と重ね合わせて作品が告発している、という考察はそうした研究の説得力ある例である。動物の表現は単純ではなく、野獣性が、男性の暴力的な側面と対応しうる一方、動物の獐猛さは、抑圧される女性の男性に対する怒りの象徴でもありうる。その他にも、動物表象への着目が、作品の描くフェミニズムの問題の思いがけない要素を明らかにすることもある。このシンポジウムでは、こうした動物表象とフェミニズムの観点から、ブロンテ姉妹、ジェイムズ・ジョイス、ヴァージニア・ウルフを取り上げ、19世紀のブロンテ姉妹の遺産を、20世紀のジョイス、ウルフがどう継承、発展させているかを考察していきたい。

アウトサイダーとしてのヒースクリフと野獣性

九州大学教授 鶴飼 信光

私の発表ではまず、アン・ブロンテの『ワイルドフェル・ホールの住人』を取り上げ、女性の抑圧された立場の動物表象との重なりを見るときともに、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』のパーサの抑圧された立場と男性への怒りに、動物と関連させた表現の観点で着目する。その上で、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』における動物表象を考察する。ヒースクリフは、イザベラ、二代目キャサリンという女性たちを抑圧する悪しき男性であり、その悪漢ぶりは動物への態度にも表れているが、アウトサイダーであるヒースクリフは、家父長制社会の中で、女性と同様に、抑圧される側の人物でもある。野性的なものを愛する一代目キャサリンと相通ずるヒースクリフの人間離れた野獣性の意味を、フェミニズムの観点から考察していきたい。

朝食を作るブルームと黒猫——『ユリシーズ』第四挿話を読む

宮崎大学准教授 新名 桂子

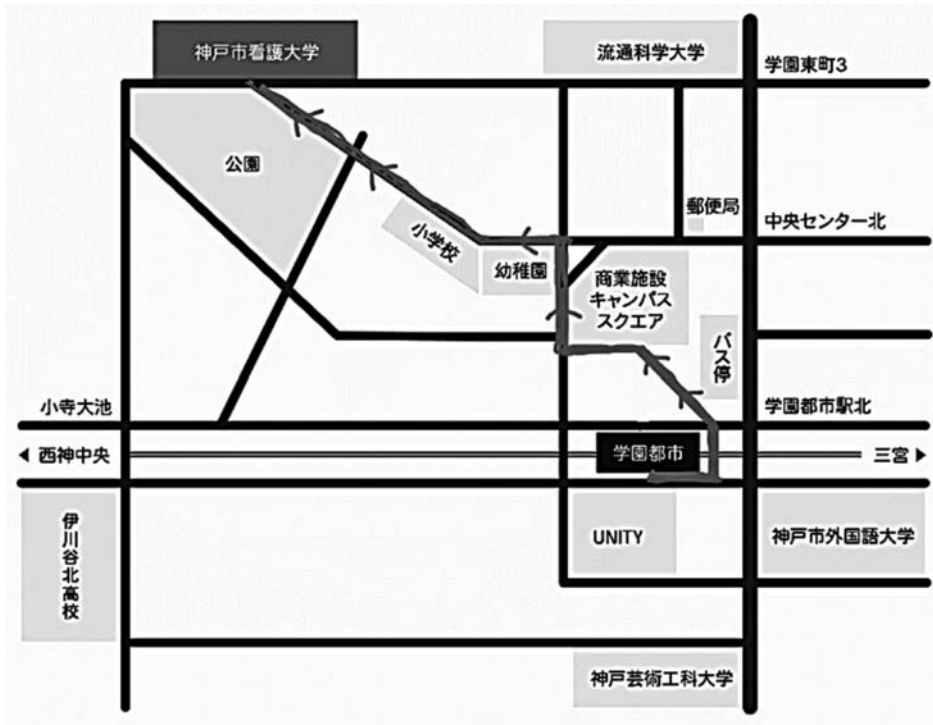
『ユリシーズ』（1922）第四挿話は、主人公レオポルド・ブルームが好物の羊の腎臓のグリルや愛妻モリーの好みについてあれこれ考えながら朝食の準備にいそしんでいる台所の場面から始まる。そこには黒猫（雌猫）がいて食べ物をブルームにねだり、彼はその相手もする。彼はまだ寝ている妻のために朝食を作り、自分用の朝食も別献立で作る。なぜブルームはモリーの朝食を作るのだろうか。実は、彼はモリーの朝食をベッドに運びさえるのだが、これにはどんな意味があるのか。また、ブルーム家に黒猫がいるのはなぜか。この黒猫は物語においてどんな意味があるのか。これらの問いを問うことで、ブルーム家の事情を深く読み解くと同時に、ジョイスが『ユリシーズ』において提示している新しい世界を説明したい。

越境するオーランドー

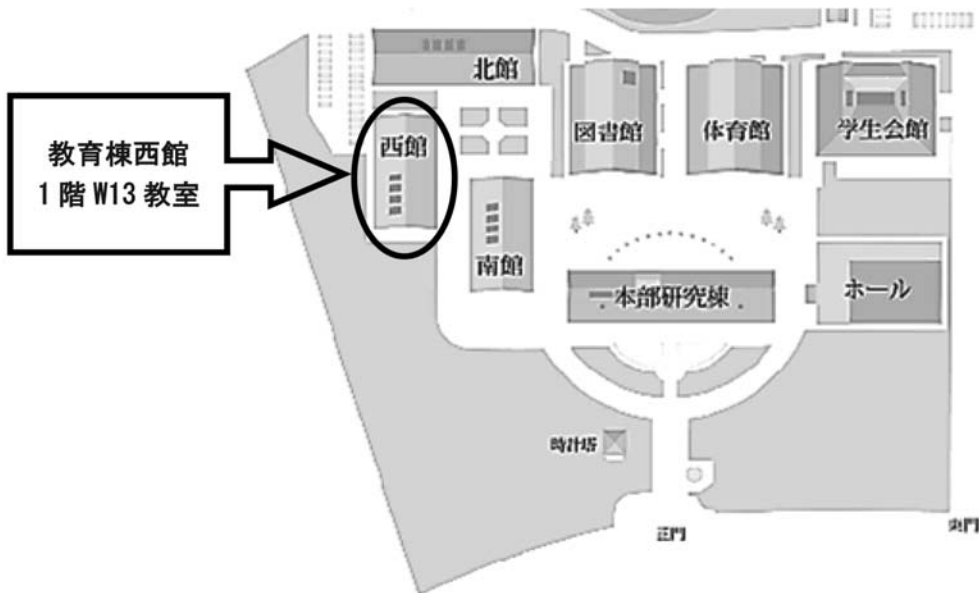
北九州工業高等専門学校講師 原田 洋海

ヴァージニア・ウルフの『オーランドー』（1928）は、主人公オーランドーが約300年もの間ほとんど年を取らないどころか、その途中で男性から女性へ性転換するという、ユニークな伝記風小説である。性転換や両性具有という特徴的なトピックから、本作は特にフェミニズム、ジェンダー、クィアの観点から論じられることが多いが、そこに動物の存在を見出すとどうなるだろうか。デレク・ライアンは本作に登場する犬たちに注目し、男女の境界を超えるオーランドーと、そのようなアイデンティティの越境を経験したり目撃したりする犬たちという図式で読み解くことで、ウルフにとってのセクシュアリティとアニマリティの関連性を指摘している。本発表では、ライアンの指摘を補助線として、『オーランドー』をフェミニズムと動物表象という観点から、とくに男性／女性、人間／動物などのオーランドーの様々な越境に着目して読み直してみたい。

神戸市看護大学【アクセス】



【キャンパスマップ】



日本ブロンテ協会事務局
 〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8 東京藝術大学音楽学部 侘美真理研究室内
 e-mail: brontesocietyjapan@gmail.com